

ふじのくに芸術祭 2025(第 65回静岡県芸術祭)文学部門文芸コンクール審査員寸評

【創作】

小説 20 作品は去年より3作品増えたが、児童文学は去年と同じ7作品であった。14 作品が 70 代 80 代のものである。10 代・30 代の応募がゼロである。若い人の参加が望まれる。歴史作品はその時代が今日に甦る意味が問われる。児童文学は前向きに取り組む姿勢の作品が評価された。(中西 毅)

【エッセイ】

評論の応募作品 7 点は、テーマが「仏教」から「AI」までと幅広く、いずれも論ずる対象を真正面から捉えた気迫あふれる作品ばかりでした。随筆 12 点は原稿量が長短様々でしたが、身近にあった出来事、身近な人物、自分自身のことなどを、誠実に捉えたものが多く、楽しく読ませていただきました。審査の基準は、自分の思いを自分の言葉でいかに伝えようとしているかにありました。(小長谷 建夫)

【戯曲・シナリオ】

戯曲・シナリオ部門の応募作品は 6 点。どの作品も作者が根気強く練り上げ、想像の世界への挑戦が感じられました。県を意識された作品には郷土愛を感じ、若い世代の人物が活躍する作品には、未来へと繋げていく作品意図が感じられ頼もしく思えました。本芸術祭も未来に繋がるよう、若い世代にも多くご応募いただきたいと思います。(村岡 由美子)

【詩】

応募数は減りましたが、今年は昨年よりもじっくりと推敲された作品が多く、数行読んだだけで無理という作品は皆無でした。作品水準の向上はとてもうれしく、皆さんが大切なものを丁寧に表現されているのを実感しました。入賞五篇は特にすぐれていて、いますぐ詩の専門誌に掲載可能だと感心しました。「県民文芸」発表に、乞うご期待。(佐相 憲一)

【短歌】

短歌部門の応募数は 71 名。五首一組での投稿は難しいと感じる人もいるだろう。だが一首だけでは表現しきれない世界を得られる好機でもある。応募作を読み、作者の生活に結びついた短歌は見知らぬどこかの読者の心にいつか必ず届く、その思いが改めて強くなった。皆さんと共に短歌の可能性を信じていきたい。(伊藤 純)

【俳句】

俳句部門の本年度の応募数は 78 編で、昨年より 8 編の減でした。70 代 80 代の方が大部分となっておりまして。しかし 20 代の方が 1 人、50 代が 4 人おり若い年代の方にもっと親しんで頂ける事を考えなければと思いました。俳句は年齢を感じさせない句が多く、若いと感じました。5 句の連作をもっと楽しんで下さい。(渡井 恵子)

【川柳】

今年の応募は 43 編とやはり昨年度を下回る数になりました。作品応募から〆切日まで、夏日及び酷暑日が続き、そんな事情もあったのではないかと思います。

五句組の連作には一句一句の川柳が共鳴し合って遥かに高い芸術性を味わえます。又読者にも深い感動を与えます。その分連作は難しいのですが。(遠藤 そら)